



堂々たる巣立ち — 卒業証書授与式 —



3月15日(水)、本校の卒業証書授与式を実施しました。

コロナ禍による様々な規制も緩和され、今年度は、たくさんの保護者の方々やご来賓の方々に、卒業生を見送っていただくことができました。

一部ではありましたが、卒業生がマスクを外して参加することもでき、徐々に日常が戻ってきている喜びが実感された式でもありました。

全員が出席した5年生は卒業生を力強く送り出す歌を、卒業生は巣立つ喜びと決意を表す歌を、それぞれの思いを込めて歌いました。

卒業生の姿から感じたのは、できたこともできなかったこともあるけれど、そこに一片の悔いも感じない、自分たちは堂々とこの学び舎を巣立っていける、という気持ちです。そんな気持ちが、式場内を歩く姿から感じられました。ゆっくりと、顔を上げて、ただ一点を見つめて、背筋を伸ばして、真っ直ぐに…。

証書授与の際に、階段を上り下りする足音も実に静かで、一步一步を踏みしめ、かみしめながら歩いているようでした。いつの間にこんな所作を身に付けていたのだろう、と思いました。

必要以上に恭しく感じられる卒業式の一つ一つの所作には、意味があります。様々なことが簡略化の一途を辿っている昨今の風潮に逆らうような側面もありますが、そこに意味を見だし、しっかりとやり遂げることで出席したどの人たちからも初めて卒業が認められるという、いわば「通過儀礼」の意義は大きいと感じています。

式の最後、式場の退場口を出てからもなお、緊張を解くことなく教室まで歩いて行った卒業生の背中に、「通過儀礼」の意味がしっかりと浸透していた跡を見て取りました。実に堂々たる姿を最後に見せて、89名のはとの子たちが羽ばたいていきました。

卒業おめでとうございます。卒業生の皆さんの前に、明るい未来が待ち受けています。

附属小学校で学んだ誇りと自信を忘れずに、思う存分、自分たちのよさや持ち味を伸ばして行ってください。

外池智校長先生による卒業式式辞

今年の冬も、三年目を迎えたコロナ禍の中での厳しい冬でしたが、三月に入ってから暖かい日も続き、日々春の訪れを感じる季節になってきました。

この佳き日に巣立ちの時を迎えた89名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

また、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠にありがとうございます。

4年ぶりに、ほぼ以前と同じような形で卒業式を執り行うことが出来ることを、皆さんとともに喜びたいと思います。

さて、卒業生の皆さん。今、皆さんは卒業証書を授与されました。これは、皆さんの6年間の結晶です。一日一日の日々を6年間積み重ねてきて辿り着いた、皆さん達の成長の証です。

附属小学校での6年間で振り返れば、本当に色々な事があったと思います。公開研究会、修学旅行、わくわく活動、はとの子運動会、はとの子学習発表会、そして何よりも日々積み重ねてきた授業と学校生活。とりわけ、4年生からの三年間は、コロナ禍での大変な三年間でした。しかし、皆さん達の願い、そして先生方の思いがあり、何とか工夫して日々の学習や学校行事などを行ってきました。修学旅行は6月末から一泊二日で実施する事が出来ました。運動会は、昨年は中止になってしまいましたが、今年は9月に三部に分けた分散開催で、趣向を凝らして実施されました。そして、はとの子学習発表会も、11月に、やはり三部に分けて実施することができました。それぞれの行事には、6年生の皆さんの思い出がぎっしり詰まっていることでしょう。

こうした様々な活動や経験の中で、皆さんは、自分で考える力、発表する力、協力する力、思いやり、リーダーシップなど、たくさんの力を身につけてきました。これらは、まさに本校の教育目標である自律する力です。先行き不透明で不確実なこれからを生きる、生き抜くために必要となる力です。この6年間で身に付けてきた、こうした自律する力を基礎として、ますます成長していきましょう。

そして、この6年間、毎日毎日皆さんを支え続けてくれたご家族、お世話になった先生方、ともに過ごしてきた友だちへ感謝する気持ちを決して忘れないでください。

さて、そうした卒業を迎える6年生の皆さんに、一つ花向けのお話をしたいと思います。それは、多様性との出会いを大切にという話です。皆さんがまだ4年生の時、3学期の始業式で多様性、ダイバーシティの話をしたのを覚えていますか？丁度1月6日で「色」の日でしたので、「色」にちなんで虹の色の話をしました。日本では虹の色は何色ですか？と尋ねられれば、普通7色ですと答えます。しかし、アメリカやイギリスでは6色、フランスでは5色、モンゴルでは3色、そしてアフリカの一部では2色と答えるそうです。私たちが日頃当たり前と思っている事は、世界的な視点から見れば、決して当たり前ではない。まさに多様性ですね。

また文学でも、皆さんが3年生の国語で習った金子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」では、「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがってみんないい」と結んでいます。

さらに学術的にも、京都大学で生態学や文化人類学を究めた今西錦司は、「棲み分け理論」という考え方を提唱しました。彼は、京都の加茂川でそこに棲むカゲロウが川の流れの速さに対応して分布していることを発見しました。すなわちカゲロウたちは違う種同士で交わるのではなく、互いに棲み分けていることを発見したのです。虫ですら、互いを否定せず、お互いに共存している。すなわち、生物は、本質的に社会的に棲み分けている。お互いの存在を尊重して生きる「共存」、そして共に生きる「共生」という考え方です。

いずれにしても、大切なのは、自分、自分達とは違うものとの出会いを決して安易に否定しない、お互いにその価値観や考え方を尊重して認め合いながら生きていくという考え方です。

私たちは、この世で一人では存在できません。必ず他者との関わりの中で生きていきます。そして、皆さんは、まだ12歳です。人生はまだこれからです。皆さんのこれからの未来には本当にたくさんの人や物事との出会いがあります。そこでは、必ず自分、自分達とは違う、異質なものとの出会いがあるでしょう。しかし、それを安易に嫌い、否定するのではなく、まずは多様性との出会いであるとして大切にしてください。それは、お互いを尊重することですし、まさに共存・共生することです。そして、そのことは自分自身の価値観を広げ、自分自身の可能性を必ず広げるものです。先行き不透明で不確実な未来、そしてグローバルな世界を生きていく、心強い助けとなる考え方です。是非、多様性との出会いを大切にしてください。

最後になりましたが、本日まで、様々な活動を通じて附属小学校を支えてくださいました保護者の皆様には、心より深く感謝いたします。今、保護者の皆様は、お子様たちが本校に入学したその日から今日までの日々を、まるで走馬灯に様に思い起こされているのではないのでしょうか。小学校での6年間を経て、立派に成長した姿で皆様のもとにお帰しできることに安どするとともに、心より感謝申し上げます。

さあ、卒業を迎えた89名のはとの子の皆さん、いよいよ巣立ちの時です。その翼を大きく広げ、大地をしっかりと蹴って、力いっぱい羽ばたいて飛び立ってください！

私たちは、これからもずっと皆さんの成長を願っています。こらからの、皆さんのさらなる成長と、すばらしい未来を祈念しまして、式辞とさせていただきます。

令和5年3月15日

秋田大学教育文化学部附属小学校 校長 外池 智

先輩から後輩へ受け継がれる豊かな子ども文化

3月に入ると、校内がたくさんメッセージで溢れました。

いつから始まったのでしょうか？先輩一人一人から後輩へ向けたメッセージが掲示板いっぱい広がっています。

「学校たんけんをしたね。こんどはみんながつれて行くよ。がんばってね。」

「5年生の国語では、4年生でもやるじょうけい大切です。5年生になると、いろいろむずかしくなります。がんばってください。」

教科の細かな内容まで伝えているところが、はとの子だなあ、と感心します。こういうことを伝えられるのは、自分がこの1年間学んできたことに確かな手応えを感じているからにほかなりません。

かつて本校の研究テーマが「豊かな子ども文化をひらく学校」だったことを思い出しました。このテーマのもとでの研究は終わっても、豊かな子ども文化が確かに根付いていることを感じた掲示物でした。



先輩から後輩へ受け継がれるものがある一方で、後輩から先輩に贈られるものの代表格と言えば、わくわく班で在校生が卒業生に贈る帽子です。

「6年生ありがとう集会」は、久しぶりに全校一斉にアリーナに集まっての開催で、子どもたちが本当に楽しそうでした。

6年生が各班の後輩から贈られた帽子を嬉しそうに被って入場したときから、会場の雰囲気は一気に盛り上がりました。歌あり、朗読あり、ダ

ンスありの楽しい会の中で、6年生が目を細めて後輩の頑張りを見守るその表情が印象的でした。集会の最後に、恒例だったくす玉割りがありました。割れたくす玉から、子どもたちの夢や願いや憧れや信頼…といった様々な感情がこぼれ落ちてきたようでした。



学長表彰

全国大会で入賞以上の活躍をした個人・団体に贈られる「学長表彰」に、2個人、1団体が選出されました。おめでとうございます。

<個人> 4年C組 高橋 蘭さん (第72回全国小・中学生作文コンクール高学年の部 読売新聞社賞)

6年A組 吉田 結さん (第24回ショパン国際ピアノコンクール in Agia 金賞)

<団体> 附属小学校合唱部 (第75回全国合唱コンクール全国大会小学校部門 銀賞)